

学校のちよっといい話 24

千葉県我孫子市立我孫子第二小学校



前校長 鍵山 智子

「仲間と共に成長する生徒との出会い」

私は、担任になるといつも学級開きの時に伝える三つの約束があった。「人の命にかかわることを軽々しく扱わない」「人が嫌がることはしない（言わない）」「お互いを仲間として大切にしよう」ことである。どの先生でもされている当たり前の言葉ではあるが、この言葉を敢えて学級開きに伝え、ことあるごとにこの三つの言葉かけを継続した。

この学級の朝と帰りの会に、特別支援学級の生徒が交流時間として参加していた。彼は、どちらかというとな口なタイプに見え、前年から学級の仲間としての交流は少ないように感じていた。他の生徒からの声かけもあまりない様子であった。ある日、彼をみると少し寒かったせいか、鼻水が出ていて、自分でもうまく処理ができていないことがあった。一瞬、周りにいた数人の生徒たちが後ずさりし、嫌悪にみちた表情をみせたように感じた。「これは生徒同士の垣根を払うチャンスかもしれない。」私は心の中でとっさに自問した。

私も自身も花粉症で鼻水には悩まされていたので、教室にはティッシュを常備していた。そこで、彼にティッシュを渡したが、うまく処理できずにいた。彼に鼻水のかみ方を教えたいが、「顔に触って大丈夫か？」と尋ね、「大丈夫」というので、彼の鼻に手をあてて、片鼻ずつ「フーン」「フーン」とかませた。夕方、彼の保護者に、学級の時間に鼻をかむ動作をすることを本人が嫌がりたりしていないかと確認の電話を入れ、これからも本人ができるようになるまで、続けることについて了解を得た。幸い嫌がっていないし、続けてよいと理解を示してくださり、それから毎日続けて鼻をかむ習慣づくりをした。彼が自分で鼻をかめるように工夫する一方で、学級全体には、「ところで、みんなトイレにひとりで行けるようになったのはいつだったか覚えてるか？」とか、「歯磨きの仕方や鼻のかみ方、お風呂の入り方で、最初からうまくできていたのか？」など、幼少期の自分自身を思い出す機会を作り、言葉かけをした。生徒たちは口々に昔の自分を伝えあっていた。

数日を経た朝の会で、いつものように差し出したティッシュを受け取ると、彼は自分自身で上手に鼻水をかんだ。学級内で「ワー」という小さな喚声が起こった。そしてなぜか拍手するみんながいた。その後、鼻水で手助けする場面はなくなったが、彼の笑顔が増え、生活班づくりや、修学旅行でも生徒同士の会話に入る姿がみられた。一番距離をとっているふうに見えた生徒が、実はインタビューがうまくて、彼はマラソンが得意なことを知った。体育のタイム走で自分と同じペースで走れることがわかり、率先してグループ作りを行い、校内駅伝大会に臨んだ。そして、進路の時には、彼が、朝5時起きで通学する進学先を選んできると知って一番心配していた姿があった。

学級は、日々の生活や様々な行事を通して、お互いを認め合い、大切にしたい仲間へとゆっくりゆっくり成長していった。別れがたいききずなができそうになった時、「卒業」という新たな成長のステージに旅立つ生徒たちを見送ることができた。

